伊勢の「歌占人」

—産土の神祭と陰陽師—

小林 幸夫

(一) 度会氏の山宮祭

以前から伊勢神宮の「山宮祭」については、いくたびか論じている^①。あらためてこの論考を「山宮」のことから始めるのは、度会氏の祭、山宮祭と氏神信仰を整理して、伊勢山田の陰陽師の姿を明らかにしたためである。その視点から謡曲『歌占』へと論は及ぶ。「歌占人」について論じて、二見の陰陽師とのつながりに言及してみたい。そこから伊勢の「八王子信仰」のかたちを眺めてみたい。

まずは山宮祭から始めよう。内宮、外宮ともに「山宮祭」は執りおこなわれるが、ここでは外宮の場合を取りあげてみたい。山宮祭とは、外宮度会氏の先祖を祭る神事である。「山宮之神事之事ハ度会氏之祖先神靈執行之事也」(『常明寺別当職年中行事式』神宮文庫蔵)とあるように、祖霊の祭である。その祭の庭は、いくたびか変遷をかさねている。ここに『勢陽雜記』から「山宮が谷」を引いてみよう。

此谷にて山宮の神事といふは毎年霜月の下旬に吉日を撰び米、大豆、麴、酒、塩、柑子、海藻、香、灯心、松、油、等種々の供物を調進して正禰宜権禰宜集會して、面々籠をぬり、火を焼き酒宴して祭る事あり。是妙見星を祭ると也。山宮の神事の祝詞にも妙見星を祭りて田園五穀養蚕を祈ると有り。亦古老の伝に、古は高

伊勢の「歌占人」

原ノ前山にて祭りしを、後に此所里近きに便りて祭りし也。泰山府君を祭るなり、共いふ。鼓が岳は当地の名山なれば山祭りにてもあるべし。山を祭るに、妙見星、又我氏人に恵みある由来あればあわせ祭るにや。山宮の祝詞を按ずるに、寛平二年以来の例を用ひて祭るといふ詞有り。又云ふ、当祭は於「繼橋郷前山辺」雖令と勤行。撰定清淨地於滝谷。建武二年祈奉遷祭庭於当地也。

繼橋郷前山辺から、岩戸山の東麓、滝谷へ、さらに建武二年、通称「山宮の谷」に遷ったという。十一月下旬、外宮の正権禰宜などが参加して、先祖に「田園五穀養蚕」の豊かならんことを祈ったという。ここに神祭の次第が述べられているが、もうすこしくわしく『外宮年中祭祀行事大略』(神宮文庫蔵)を調べてみよう。

十一月下旬、山宮、

辰刻人長按内を申、禰宜権官物忌參宮神拜して山宮の祭場に行、人長湯紙を持来て手水す、物忌溪水にて手を洗ひ、各舗設に列座す、物忌座を起椎萱を以て山宮の御殿又御棚を宮構す、時に禰宜座を起て其御殿御棚を見分す、次に強飯饗膳盃酌有て、又人長湯紙を持来て禰宜権官手を洗ふ、物忌座を起溪水にて手を洗ひて神供を御殿に調進し、禰宜の奉る幣串を物忌取て御殿御棚の前に刺立、長者の禰宜座を起御殿の前にて祝詞を宣、人長又錢切散米を

伊勢の「歌占人」

まく、次に物忌神供を撤し、長者の従者各座に持来りてこれをいたゞき、御殿御棚を毀ち破りて各座を起て帰館す、装束、禰宜衣冠、権官狩衣、正副物忌、政所狩衣、人長白張、

禰宜、権官、物忌ら参宮して祭場に向かう。まず谷水にて手を洗い、椎・萱をして棚をしつらえ、仮棚を作って、神を迎える準備とする。つぎに神前に「強飯饗膳」ありて、「盃酌」をいただく。つまり、神人共食の場となる。長者の禰宜は仮設の御殿の前で、祝詞をあげ、散米あり。終わりにて、神供を撤して神棚を毀し、神宮に帰ることになる。簡単にいえば、椎・萱をもって仮宮を造り、神を勧請して神人共食の宴を行う。祝詞をあげて祈願とする。祭を終ると仮宮は毀される。これが神祭の次第である。柳田國男はこの「山宮」を、「凡俗の眼には見えない祖霊の隠れ宮」と称している。

しかしその「祖霊の祭」を、『勢陽雜記』は、「妙見星」を祭り、「泰山府君」を祭るとする。不思議なことである。仮宮の前で唱えられる『山宮祭祀詞』（神宮文庫蔵）にも、

妙見大菩薩御門人日本朝東海道伊勢国度会郡沼木郷河原村仁居住
須留掛畏豊受太神宮一禰宜從四位下全彦二禰宜正五位下満彦禰宜
同常和禰宜同貞和禰宜同因彦禰宜同常生禰宜同常有禰宜同常久禰
宜同継彦禰宜同常副 結縁同心仁志天奉仕須留

というぐあいには、妙見大菩薩の祭にしたがう、全彦禰宜以下、度会祠官の名があげられている。妙見星や泰山府君は、のちに述べるように、陰陽道の神である。いやしくも伊勢神宮神官の「祖霊の祭」が、陰陽道の神を祭るとはどうかということだろう。何か子細があるにちがいない。この祭に陰陽道はどのようにかかわるのか。

(一) 岡崎宮妙見本縁

外宮には、もう一つ山宮の祭場がある。「岡崎宮」である。『岩屋本

縁記』（神宮文庫蔵・寛文二年写本）から、「岡崎宮妙見本縁」を示してみる。岡崎宮妙見堂の縁起である。

妙見本願度会氏遠祖大神主飛鳥末孫大内人高主、貞観元年己卯十一月十五日、一子前大物忌子、入御贄河卒去、八十五才、即時從御贄河淵底而、得妙見星童形像、奉居尾部御陵以西小田岡崎宮靈地、利、折氏人之繁昌、爰貞観二年十一月十五日、一胞二人男子生、宗雄・冬雄是也、同三年十一月十八日、同胞二人子生、春海・秋竝是也、同四年十一月十五日、亦同胞二人男子所生、冬綿・春彦是也

仁(和四年十一月十八日)神主春彦任、妙見尊星王靈託率氏人等一向清淨山谷奉祭本地妙見大菩薩日光月光十二神王二十八宿諸天三宝孔雀王帝釈神等也、以遊年戌亥位歳為祭年也、今号山宮祭是也、凡岡崎宮座妙見北斗尊星者神主等妻子專供養尊重婦依相應験仙也、此尊之變化之星者名曰軸星所居之宮殿名之曰紫微宮軸星者國王也、故名之曰一字金輪也諸星主也、須弥頂上有宮殿名紫微也身余星三万五十由旬那下在之宿曜道此金輪習四辟不動亦軸星付星七星九曜十二宮亦八宿凡六禽天五行日月五星地五行木火土金水五大也

本云永保二年二月八日 一校了 常明寺別当性順書写畢

寛文二壬寅年四月十八日書写畢 権禰宜從五位上度会神主常基

その昔、貞観元年のこと、度会氏の遠祖高主神主の一人娘、十五歳の大物忌子が、御贄川の流れに入って亡くなった。ただちに淵の底を探しても、亡骸は見当らず、この妙見の霊像を感得した。これを安置したのが岡崎宮、すなわち最初の山宮祭場である。父の高主が家では、次の年の十一月十五日から、毎年同じ月の同じ頃に、三年続けて男子の双子が生まれた。その六人の男の子の六ばん目が、春彦、すなわち天神の末社の白大夫のことだという俗伝のある人で、この春彦が、岡

崎宮の靈託に基づいて、仁和四年、十一月十八日、始めて清淨の山谷に日月諸星二十八宿五星を祭ったのが、山宮祭の起原だといふ。

この岡崎宮に、妙見星、すなわち、北斗七星が祀られる。そこは、かつて尾部山の御陵のあったところ。常明寺域内なる岩窟を云うが、妙見堂の東北三丁ばかりのところである。その尾上の岡崎に存するのが、岡崎宮である。「岡崎宮妙見本縁」は、度会春彦が、妙見星を奉じて、山宮祭をおこなったのを、ここ岡崎宮とする。それが交転をへて、「山宮の谷」となったといふことだろう。

度会氏には二門と四門があり、春彦は二門に属する。度会氏の中祖乙乃古命には四男あり、一は爾波、二は飛鳥、三は水通、四は小事、といふ。そのうち一と三の家系は絶えて、飛鳥と小事の末裔のみがつづいた。したがって度会姓でも、飛鳥の末裔を二門、小事の方を四門と称した。松木、檜垣、宮後、久志本などは二門、出口、藤波、廣田などは四門である。春彦は、二門飛鳥の末孫であり(『元徳注進度会系図』元徳元年・一三二九)、春彦の後裔は松木氏を継いだといふ。

少なくとも、系図をたどるかぎりにおいては、春彦と陰陽道のかかわりは見えてこない。岡崎宮(妙見堂)に度会春彦が、妙見星(北斗七星)を祭るとはどういうことだろう。『藤園雜纂』(神宮文庫蔵)につきのような記事が見える。

妙見堂ノコト石屋本縁ニ載スル故事覚束ナキコトナリ。但シ高主モ春彦モ陰陽道信向ノ人ナリ。尤モ妙見星ヲ祭ルコト、此頃一般ノ風儀ニテ、山宮祭ト云フモ太山府君ヲ祭ルナリ。山宮祭ト云コトハ山君祭ト称ヘタル山君ヲ山宮トナセルニテ、山君スナハチ太山府君ノ略称ニテ北辰星ノコトナリ。

山宮祭に一族を率いて妙見星を祀る高主や春彦を「陰陽道信仰の人」とする。だが、事実ではない。後人が春彦を「陰陽道信仰の人」として祭ったのである。それはかつて、度会二門が、妙見星を奉じて、山宮祭を営んだことを、春彦に託して伝えたのだろう。双生児の誕生が、

伊勢の「歌占人」

三年にわたってつづいたといふのも、後に作られた「神話」と考えられる。その祭に、陰陽道を奉じる人々が、なにがしかかわっていたのであろうか。「石屋本縁ニ載スル故事覚束ナキコトナリ」と云うのであれば、「岡崎宮本縁」は、事実ではなく、伝承とすべきなのだろう。かりに伝承としても、どこから生まれてきたのか。知りたいところである。

(三) 山田郷産土八社の御頭神事

伊勢山田の陰陽師の活動がうかがえるのは、『神宮典略』にのる「八王子社祝」の記事である。

此社は神宮に拘はらず、村人の沙汰なれば、社祝の代りに巫をもて仕へしめしならん。

二門(※度会氏)氏社には博士の祝詞を申すよしを記したり。かく巫といひ博士といふのは、男巫にて、今の世にいはいはゆる陰陽師の事なり。「今も此社は其村の陰陽師此社の祭を預かれりと云。」委しく知りがたし。「今も此社は其村の陰陽師此祭を預かれりと云。」委しくは知がたし。

ここにいう「八王子」は内宮・中村の社いふ。以下、山田の産土社について述べる。山田の産土八社では、正月八日、三月三日、九月九日に社神楽がとりおこなわれた(『神楽中小日記』)。八社とは、大社、藤社、茜社、坂村社、今村社、牛頭社、箕曲社、これに吹上町の世木社が加わる。世木社は、外宮撰社にして、度会氏の氏神・天牟羅雲命をまつるといふ。この八所の社神楽について、『神都雜事記』(神宮文庫)は、

彼ノ役人(※神楽役人)等ノ初ヲ尋ヌルニ、山田ニ散所スル八所ノ氏神社ノ神楽男ニテ、往古ヨリ正月十五六日、或ハ彼ノ社々ニテ神楽ヲ奏シ社神楽トイヘリ。

伊勢の「歌占人」

というふうには説明している。御師の家の伊勢神楽は、産土社の神楽役人を雇って行われていたというのである。外宮の産土八社の神楽については、本田安次が、その歴史を簡略にまとめているので、長くなるがそれを引いて、説明にかえたい。

この神楽（※伊勢神楽）といふのは、古くより外宮の御師によつてとり行はれてきたもので、願主の申出により、役宅を清め、神殿に神座を設けて、これに両宮を勧請申し、御師の下にあつた神楽役人達が、大勢参集して行つたものである。（中略）この神楽に携つてゐた神楽役人といふのは、毎事間にもいふやうに、もと山田の八ヶ所にあつた氏神の社に属してゐた神楽男であつた。これらは中古以来、神宮に奏進する臨時祭の楽舞を離宮院に於て執行し來つた大中臣の氏人以下の歌人、歌女、琴生、笛生、神人、市女等の裔であつたと思はれるが、世は戦乱に及んで離宮院も興廢し、久しく臨時祭も行はれず、神領等もだん／＼失はれるに至つて、楽人達は各社に属し、社神楽といふのをとり行つてきた。尤も、社神楽そのものの歴史は、ものに現れたところでも、建久にまで遡ることが出来る。

伊勢神楽の衰運にあつて、神宮の庇護を失つた神楽役人は、山田各所の産土・八王子社に属していた。かれらは御師の下にあつて、産土社に神楽を奉納する役に携つたのである。その歴史は、鎌倉建久の代までさかのぼるといふ。

山田の産土八社の祭は、氏神の祭である。ここにいう氏神とは、本来、氏神に奉仕している人々の祖先の靈魂を神として祀つたものと考えられていた。祝詞を奏して、神靈を招き下ろしてしたのである。この氏神祭の神楽に、「社祝」に代わつて、奉仕するのが、『神宮典略』（八王子社祝）、それぞれの社に属する「博士」、「巫」、いわゆる陰陽師なのである。のちに述べるように、彼ら陰陽師は、土御門家支配下の「陰陽師」とは別に、民間にいて卜占にしたがう曆陰陽師であつ

た。彼らは八王子社に属して、産土祭の行儀にしたがっていた。

『宮川夜話草』（卷之四）は、「御頭神事」についてつぎのように報告している。

毎正月十五日三日山田市中処々に此事あり、土人産土祭ト云、昔は魔払なりとて箕を二ツ合せて獅子頭の形を作り祭終れば焼払なり、今も隣郷には然せり、今の御頭といふものいつれの頃よりか獅子頭の数八、彩色を施し数百年を経れば里人産土神の神体と覺えり、されど此祭終れば、橋の上に持行太刀にて伐払ふ事あり、彼焼捨しに代へしものによ、此祭正徳の頃迄は夜陰なれば所々大炉火といふもの有て今も然り、又積木といふものあれば彼は一なりと覺ゆ、

御頭神事の獅子舞を終えて、夜陰に火は焚かれ、橋の上で「魔」は祓いやられる。これは現代の民俗に照らせば、小正月の「塞の神送り」であろう。このようにして度会氏の産土の神は送られたのであろう。

その神事に奉仕して、陰陽師は、どのような役割をはたしていたのだらう。それについて『神民須知』（産土神社獅子）は、つぎのやうに述べる。

山田郷産土神社々有。大社、藤社、茜社、坂村社、今村社、牛頭社、箕曲社、落獅子「此一座社地無」。総テ八社也。（中略）

夫レ山城ノ国祇園ノ社ハ素戔嗚ノ尊ニテ、牛頭天王トモ武塔天神トモ申ス。行疫ヲ払ヒ除ルノ神徳マシマス。其昔山田郷疫癘流行ノ時、人民此ノ神（※産土神獅子）ヲ祭り疫癘ヲ免シニ由テ即郷々ノ産土神ト崇祀シナルベシ。俗ニ尾頭ト云ハ獅子也。祇園ノ社ニ獅子有。（中略）此ノ祇園ノ獅子ニ倣ヒ、山田産土神社モ祇園ト同神ナル故、社ニ獅子ヲ納メ置。正月十六日其社々神事ニテ獅子出テ、其産土ノ封域ヲ廻リテ獅子舞ヲナスナルベシ。（後略）

「御頭」の獅子をまわすこと。それによって山田郷に跋扈する疫癘

を敎いやること。それが彼らの仕事であった。八社の神は、「祇園同神」の「牛頭天王」であり、「素戔嗚ノ尊」であった。『神民須知』(「産土神社獅子」)は、牛頭天王と八王子について、

右ノ産生神ハ素戔嗚尊也、或ハ八王子トモ云、所謂八王子トハ簗蓋内伝曰、牛頭天王凌南海到龍宮、龍王出迎、天王遂娶頗梨女、既而経年誕八王子、

と述べている。産土社の陰陽師は、後にのべる「八王子祭文」を誦読して、山田郷の疫癘を敎いやったのである。牛頭天王と龍宮の姫君・頗梨女の間生まれた八人の王子、この八王子信仰について、箕曲社を取りあげて、もう少しくわしく論じてみよう。

(四) 山田箕曲郷・箕曲社の陰陽師

山田箕曲郷、その郷域は、現伊勢市吹上・河崎・船江・馬瀬町、現御園村中島などの、勢田川中下流域左岸一体に比定される(『三重県の地名』)。

勢田川ニ傍テ水際ノ郷名ナリ。今箕曲神社旧ハ外宮域ノ良位ニアリ其地モ箕曲ト称ス

と『勢陽五鈴遺響』(度会郡「箕曲」)には記されている。郷内には、勢田川が流れ、水の神を祭っている。河原社・河原淵社・毛理社(杜社)の三社があり、度会氏の遠祖「天牟羅雲命」を祭神とする。

その昔、郷民は、たびたび洪水の害に悩まされていたらしい。外宮撰社「箕曲氏社」について、『二宮管社沿革考』(巻五)は、

此社ハ長徳檢録ニ曰ク、箕曲ノ氏社ト云ヘリ。寛文三年諸社再興ノ時当社モ造営アリ。(中略)土俗流社ト称ス。(中略)「杉の落葉」ニ云ク、昔洪水アリテ此社流漂シ、幸田ノ辺ニ流レ止リタルヲ、俗ニ流社ト呼来リ、

と記録している。たびたび勢田川の洪水に見舞われて、社祠そのもの

伊勢の「歌占人」

が、流された。その故に「流社」と称された。箕曲の氏神社とされ、外宮氏神八社のうちのひとつである。もちろん、先に述べたように、この箕曲社でも牛頭天王の祭は行われている。『勢陽五鈴遺響』(度会郡「箕曲氏社跡」)には、つぎのような記録が見える。

古昔ハ八社八頭アリト云其謂ハ実々他邦ノ獅子頭ニハアラス素蓋鳥尊ノ所斬ノ八岐犬蛇ノ頭ヲ表セシナリ。其故ハ頭上ニ一角アリ。「御頭祭」の八頭の獅子頭には、一角の「角」ありという。この獅子頭が、箕曲の郷域を巡って、疫癘の害の安らかならんことを祈ったのである。

その牛頭天王の祭にしたがった神楽役人は、山田産土八社の陰陽師である。『勢陽五鈴遺響』(度会郡「箕曲氏社跡」)は、箕曲社の陰陽師のすがたを伝えている。

箕曲氏ト称スルハ度会荒木田外ノ異姓ニシテ未其姓ハ祠官ニナキ処ナリ今其地ニ居住スル曆造家ニ箕曲ト称ス氏族アリ是古昔ノ和泉掾ノ類ナルヘシ其氏族ノ崇祀スル処ノ神祀ニシテ今外宮ノ末社ノ列ニ入レリ。

箕曲と称する氏族は、「曆造家」にして、いにしえの「和泉掾ノ類」であろう、という。彼らが仕える箕曲社が、「和泉掾」ということばを解くカギとなる。

『三方会合諸旧例書』が記録する「曆陰陽師白人人数並曆之事」を見れば、「曆陰陽師」なる記事がある。

一、曆陰陽師拾四人

但シ先年ハ箕曲主水、保利田山城、若太夫三人陰陽師ニ而残りハ白人ニ候処、追々土御門家相頼、官名申請候事、

箕曲主水、箕曲主計、飛鳥帯刀、瀬川舎人、中川図書、山口右兵衛、村松左京、富田大貳、中地外記、宮崎左近、西嶋左門、箕曲主膳、中川隼人、保利田山城

ここに「箕曲主水、保利田山城、若太夫」の「三人」の「陰陽師」

伊勢の「歌占人」

があがっている。他の者も、他日、土御門家に届けて、陰陽師の「官名」を申請するというのである。「山城、若太夫」の名乗り(官名)に照らせば、箕曲に住まいする「和泉掾」も、およそ推定できる。おそらく「和泉掾」の名をもつ陰陽師であろう。ただし、箕曲主水以下の「白人」は、いまだ土御門家から「官名」を受けていない、民間の「陰陽師」なのである。

柳田國男は、「伊勢山田では唱門師を、陰陽師とも曆師ともいった」と述べている。おそらく彼らは、土御門家の免許を受けていない民間の陰陽師と思われる。曆・卜占・祈禱のわざにしがっていただけだろう。今、ここに『竈内伝金鳥玉兎集』揚憲本(慶長年間・一五九六〜一六一五)から「天道神ノ事」の一節を示してみる。

右天道神ハ牛頭天王也。万事ニ大吉、此ノ方ニ向テ袍衣ヲ葺シ、鞍ヲ置キ始メ、一切求ル所成就ノ所也。

天道神とは、「牛頭天王」のこと。「天道神の方」とは、「求めることはすべて成就するという最高の方位」である。「曆家」(造曆・曆注書などを作成)のいう吉方の神である。卜占のこと、曆の作成にしがう陰陽師は、牛頭天王を奉じていたのである。箕曲社に属して、「御頭」の神事、獅子の舞の祭にしたがったのは、彼ら陰陽師であった。彼らは正月十五日の御頭神事とき、外宮北御門橋前にて獅子舞を演じて、見物した外宮の御子良から夷扇一本が与えられた(『神宮典略』十五「獅子舞」)。柳田國男によれば、伊勢山田の曆陰陽師は、毎年除夜に外宮玉垣門の外に押しかけ、櫓を投げ込んで帰ったり、氏子の家を廻って、祝言の舞を演じたりした。いわゆる唱門師である。箕曲氏は、外宮の御師ではないが、箕曲氏社に属して、御頭神事に奉仕した巫祝の徒、陰陽師であった。

(五) 御頭神事の八王子祭文

井坂徳辰『神境郷社天王八王子配祀考』(神宮文庫蔵)にしたがえば、正月十五日の御頭神事には、山田産土八社の氏人が参集して、その祭の庭で、『八王子祭文』が読みあげられた。祭文は室町時代、永祿のころから読みあげられてきたが、制作の時代は、さらにさかのぼるといふ。

右八王子祭文ハ、箕曲社ニ用ヒタルモノニテ、勤役ノ名長ノ人名ニ拠テ考フルニ、永祿ノ比ノ祭儀ニ読ム所ト見エタリ。然レドモ祭文ハ、其時代ニ作リタルモノニアラズ。古来相伝ヘテ用ヒシ文ナル事疑ナシ。(中略) 此祭文ニ拠テ見レバ、産土神社八王子祭ニハ、其郷居住氏子ノ禰官等始トシテ上中下ノ氏人村人悉参集シテ、祭儀ニ預リシ事知ラレタリ。

ここにいふ氏人とは、神の血筋の者、神の後裔であり、その尊き血筋をひくゆえに、その祭に奉仕する資格あり、とされる人々である。氏人はもちろん、伊勢神宮の祠官も、産土の氏神の祭に参集したのである。

箕曲社の氏神祭りには、『八王子祭文』が読みあげられた。その祭文がどのようなものであったか、定かではないが、およそ推測はできる。ここに神宮文庫蔵『八王子祭文』を、少し長くなるが示してみよう。「八王子祭文再拜」で始まり、「牛頭天王縁起」が述べたてられる。(前略)

・時ニ武容天神王井所生八王子ノ誓如^①此蘇民将来申テ云末代ノ衆生何蘇民将来カ子孫トシラシメ奉ラント申。神王宣ク茅(チガヤノ)輪ヲ作り右ノ腰ニ着ケシメヨ。註(シルシ)トシテ守護セシメント宣フ。仍今日蘇民将来カ子孫ト称テ御幣ヲ捧テ供物ト獻掛ヲソロシク御座ス。東王ノ父王西王ノ母天及所生八王子ノ眷属諸神等證知納受セシメ給ヘト申。

一番 渡会□光 二番 橋秀保 三番 大中臣國秀
四番 服部元貞 五番 服部元家 六番 橋秀元

七番 大中臣弘真

維当大歳玉女天玉御門ヲ開給テ灯明ヨムクト大スナリ。玉城ヨリ
異東海道勢州渡会郡山田腹岩淵郷二居住セシメ給諸大施主禰宜等
氏人村人二天王子ニ奉仕セシメ給。然則所献種種ノ供物テ三輪清
浄ナリト照納シ給テ随喜悦預ノ上ニハ上中下氏人各息災延命ニ惠
ミ保タシメ玉ヘ。神徳ノ上ニハ弥神徳ヲ重ネ高位上之高位ヲ授カ
リ給テ氏ヲ統門ヲ並ヘ夜ノ護リ昼ノ守リニ平ケク安ケク保タシメ
給ヘ。人間ノ間ニハ朝息ニ預リ大臣公卿ノ愛隣ヲ蒙ラシメ給テ各
門々家々安穩泰平ニサキワイ給ヒ年穀□□ノ望ミ如意ニ惠ミ授カ
リ給テ男女從類眷属併テ安穩泰平ニ保タシメ万代ノ間神明三寶ノ
願厚ク広ク惠ミサキワイ給ヘト申。

・抑今日之御祈成就砌ナレハ上天下界ノ神祇宜家為随喜善願定来
臨影向シ給フラン。然則奉始梵天帝尺天□内外二宮十一所別宮当
村二天八王子熊野三所権現八幡大菩薩ナト六十余州大小神祇別氏
人本命元辰当年属星諸宿曜ニ併為法案莊嚴惣神分ニ般若心経テ大
般若経テ

・退申財施法種々莊嚴。然則チ二天八王子此由ヲ證知納受セシメ
給テ上長官ヲ始メマイラセ上中下氏人長寿福樂惠テサキワヘ給ヘ。
殊ニ日比ノ間精進ヲ致ト雖凡夫境界ノ身ノ一所從眷属中ニ付テモ
懈怠ノ罪咎モマシマサン。無罪無咎如法ノ御勤メナリト照納シ給
テ天子孫孫至ランマテ千秋万歳寿□□ヲ堅□シテ保タシメ給ヘ。富
ヲ施代悦ヲ演如海給ヘト申。再拜々々。敬白。

天保十二年六月 度会履正写

檜垣河内守度会貞次自宅之本、今又書写校合畢 度会延貞

こうして山田郷の氏人の安穩泰平と延命息災を祈念して結ばれる。

ここにも伊勢神宮の長官が祭の場に奉仕すると語られる。この『八王

伊勢の「歌占人」

子祭文』を写したのは、度会履正、度会貞次所持の一本を写して校合
したのが、度会延貞と記される。つまり、御師の間に伝えられた『八
王子祭文』である。

さらに牛頭天王と龍宮の姫のあいだに生まれた「八王子」の名を、
祭文にしたがってあげてみよう。

其時ニ神王ハ龍宮ニ着キ給フニ龍宮照耀ヤク龍宮驚テ出向テ事由
ヲ承テ女子計ヲ奉事既給シ八箇年住給間八柱ノ王子タチヲ生給フ
其御眷属八万四千六百五十四神也其中ニ大悪神御坐蛇毒氣神王ト
申此眷属ヲ引卒シテ返給ニ先宿借奉ル蘇民将来カ恩徳ヲ報ント宣
テ蘇民将来カ子孫ト云シ限ハ世々万代ニ至ト云トモ守護ヲ加ヘ哀
礼ヲ成サント宣名誓願ヲ立テ宣タマフ

第一ノ王子ノ御名ヲハ相光天王 誓願ニ云 若人千万人超過思

ワン我名ヲ百返称セ ハ必勝シメン

第二王子ノ御名ハ魔王天 誓願ニ云ク 若田畠作スルニ諸ノ悪

虫ノ食損ニ我名ヲ九 返称セハ必五穀成就セン

第三王子ノ御名ハ俱魔羅天 誓願ニ云ク 若人ノ家ニ諸怪有ン時

ニ我名ヲ百返誦セハ 必守護セシメン

第四王子ノ御名ハ徳達神天 誓願云 若女人血アヘサラン時我名

ヲ百返誦セハ必アヤ シメン

第五王子ノ御名ハ羅侍天 誓願云 若家鳥獸ノ怪有ン時我名ヲ我

名ヲ百返誦セハ形ニ 随テ守護セシメン

第六王子ノ御名達尼漢天 誓願云ク 若人家ニ畜生奴婢怪有ン時

我名我名ヲ百返誦ハ 必満滅シメン

第七王子ノ御名侍相天 誓願云 若人家内ニ五体惱物在ン時我名

百返誦ハ必除癒セシメン

第八王子ノ御名ハ宅神相天 誓願云家内ニ腹胸病者有ン時我名

ヲ百返誦ハ必除癒ン

尔時武答天神王并所生八王子ノ誓如此

武答天神の「眷属神八万四千六百五十四神」の中の「大悪神」、すなわち「蛇毒気神王」は、眷属を引き連れて帰りに給う。この時、「蘇民将来」の故事にならって、箕曲氏社の氏は、厄除けを祈って、「蘇民将来の子孫」の札を、家々の門に飾ったという。祭文には、山田郷民に対する「八王子」の「誓願」が語られている。正月十五日、この産土社の祭りに加わって、『八王子祭文』を読みあげたのは、山田の陰陽師であった。さらには、郷民の厄を祓う「御頭神事」に奉仕したのである。

(六) 常明寺・神萱落社の茅萱祭

山本ひろ子にしたがえば、常明寺境内の神萱落社は、「(外宮)八王子信仰の根拠地」であった。⁽⁶⁾その常明寺は、度会氏の氏寺であった。今ここに『勢陽雜記』から「常明寺」の記事を拾ってみよう。当寺は、間の山、古市にあった。もと真言宗であったが、寛永年中に天台宗に改宗した(『宇治山田市史』)。前に述べた妙見堂を管理したのは、度会二門の氏寺、この常明寺である。

向大神宮内院といひ高日山と号す。本尊薬師如来。寺前の額は後陽成院の宸翰と云々。元来尾上陵と云ふ所是也云々。或古記に、尾上陵は岡崎宮より東にあたるとあり。案ずるに、此所其方角に必ぜり。岩窟あり。是則尾部御陵也。倭姫世記曰「倭姫命自退尾上峯ニ而岩隠坐」云々。しかれば則此陵の事也。今の俗此岩屋を婆羅門の岩屋と云ふ、誤り也云々。倭姫命の御廟所なれば、何ノ比よりか、二宮の禰宜の氏等として祭祀等数度有之也。殊に度会二門の氏神を祭るの由古老の伝へ也。彼の廟庭に合せ祀るならし。於今二門氏人不残彼寺に出来り供養の配籍回文不怠し。茅の神事、寺の定の祭などと言ひて神楽の儀式祭祀の法式あり。此山を高日の岡と云ふ。依之高日山の号あり。度会氏常明と云

ふ人中興建立せしに依て、常明寺の号有りと云々。

この寺にある岩窟を「尾部御陵」といった。ここを「倭姫命」の御廟と伝えている。この寺にも度会二門の氏神を祀る祭祀がある。その「茅の神事」に「八王子祭文」は読みあげられる。

神萱落社は、常明寺の境内地にあり、ここも度会二門の氏神である。そこで執り行われる「茅の神事」が、茅萱祭である。『常明寺別当職年中行事式』(神宮文庫蔵)から十二月十日の「茅萱祭」を引いてみよう。

一、先内陣ニテ般若之法則有之、大般若経ヲ番之御禰宜衆御参勤被候間・萱落社ノ前ニテ八王子ノ祭文有。別当常楽坊之彼役也。一、祭文終リテ後、案主社ニ飾リ有ル茅萱ヲ取ツテ常明寺住持ニ渡シ、御かじ有り。

この祭式のうちに『八王子祭文』は読みあげられる。もちろん「牛頭天王縁起」である。読みあげるのは常明寺別当職・常楽坊の役(『常明寺別当職年中行事式』神宮文庫蔵)。祭文が終わると、社頭に飾ってあった茅萱を常明寺の住持が、加持をして各人に配ったという(『常明寺別当職年中行事式』)。

もう少し「茅萱祭」の神事を見ておこう。『常明寺神事作法』(神宮文庫蔵)の記録である。

十二月十日常明寺神事作法

一、先内陣ニテ般若法則読テ大般若ヲ番之禰宜御被成候間・庭ニ出テ茅之輪之前ニテ八王子ノ祭文有リ。番之御禰宜八十人之御神主様之内二人ツツ廻番ニテ御参御成候

常明寺の社僧と神萱落社の禰宜が、神事の席につらなる、神仏習合の作法である。彼らが法則を読みあげ、大般若経を転読する。つづいて庭に出て、「八王子祭文」が、別当常楽坊によって読みあげられる。それならばもちろんこの祭式は、疫癘を祓う神事である。茅萱は、加持祈祷ののち、度会氏の氏人に配られる魔よけの「護符」となるので

ある。いわば、御霊の祭りといつてもいい。内宮と外宮の境なる地、間の山なる常明寺で行われる疫神祭祀の行儀であった。ここにいう「別当常楽坊」とは、神宣落社の社僧であり法師陰陽師であろう。彼らが祭文を読みあげたのである。

(七) 伊勢の歌占人

長々と外宮の陰陽師の活動について追いかけてきた。彼らは「度会春彦」を奉じる「陰陽道信仰」の人である。度会春彦を祖と仰ぐ陰陽師、巫祝の徒といつていい。彼らは山田八社の氏神祭に加わり、祭文を読みあげた。八社の「御頭神事」には、神楽の役として、郷村を巡り歩いた。いま彼ら陰陽師の姿を謡曲『歌占』(観世元雅)にうかがってみよう。この一曲には、伊勢国二見浦の神職二見の大夫度会の何某という歌占人が、シテとして登場する。

シテ「占問はせ給へや、歌占問はせ給へや」

シテ「神風や、伊勢の浜荻名を変へて、伊勢の浜荻名を変へて、葦といふも芦と言ふも、同じ草なりと、聞くものを、所は伊勢の巫子なりと、難波のことも問ひ給へ。人心、引けば引かるる梓弓、伊勢や日向の、ことも問ひ給へ。」

伊勢二見の神職度会何某は、「伊勢の巫子なり」という。「巫子」とは、前に述べたように陰陽師である。

二門(※度会氏)氏社には博士の祝詞を申すよしを記したり。かく巫といひ博士といふのは、男巫にて、今の世にはゆる陰陽師の事なり。「今も此社は其村の陰陽師此社の祭を預かれりと云。」委しく知りがたし。「今も此社は其村の陰陽師此祭を預かれりと云。」(『神宮典略』「八王子社祝」)

二見浦の八王子信仰については、のちに述べるが、度会何某も「歌占」を職とする「男巫」(『歌占』)、卜占の徒であろう。歌占とは、

伊勢の「歌占人」

「卜問ふ人の、手まさぐりに取あたりたる短冊の歌を読奉れば、その歌よりて、卜問ふことを判(ことわ)るわざなりときこえたり」(伴信友『正卜考』)とあるように、歌によって、神の意志を占うわざである。歌占の男巫・度会何某は、

小弓に短冊を付け歌占を引き候ふが、けしからずただしき由を申し候

というように、十二枚の短冊を小弓に付けて、占いのわざとする。その小弓とは、つぎのようなものである。

此村(三津村)に度会家次が末葉、北村某と云有。児等かんに参る者、皆此家に盃して参ると云へり。伊勢三郎が太刀、又歌占の弓と云うものを伝来す「本弓にて凡長三尺許、取柄ハ赤地の絹の上を糸にて蒔けり」。八枚の短冊弦に付たり。弓の本末に歌あり。本ハ神こゝろたねとこそなれ歌うらの、末にハひくもしらきのたつか弓かな(『伊勢参宮名所図会』・巻五上「三津」)

これによれば、弓の本・末に「神こゝろたねとこそなれ歌うらの／ひくもしらきのたつか弓かな」と記されている。さらに弓弦に付けられた短冊には、八首の歌が、それぞれ書かれている。

ますかがみ底なるかけにむかひみてしらぬ翁にあふこちする(拾遺和歌集・巻九)

としを経て花のかがみとなる水はちりかかると曇るとふらん(古今和歌集・巻二)

末の露もとの雫や世の中のおくれさきだつためしなりけり(新古今和歌集・巻八)

ものの名もところによりてかはりけりなにはのあしは伊勢の浜荻(菟玖波集)

鶯のかひこの中のほととぎすしやが父に似てしやが父に似ず(万葉集)

千早振よるずの神も聞こしめせ五十鈴の川の清き水おと

伊勢の「歌占人」

北は黄に南は青くひがし白にしくれなるにそめいろのやま
ぬれて干す山路の菊の露の間に散り初めながら千代も経にけり
(古今和歌集・巻五)

ここから一首を引いて、その歌から「神ごころ」を測るのである。神意は歌によって示されると考えたのである。それぞれの出典を記しておいたが、「北は黄に」の歌がよくわからない。里人が引いた歌は、「北は黄に。南は青く東白」の歌である。柳田國男は、これを和泉式部の作とする説を紹介しながら、解説をくわえている。それを左に写しておこう。

蘇迷蘆とは佛教にいう須彌山のこと、爰には単に染めるといふ掛言葉の為に、五色の四つを東西南北配置したのみで、古来の五行説とは一致もせず、そんな歌を教養ある官女が、詠じた筈のないことは明らかですが、歌占人は之を神歌として取扱つて、父の恩は山より高しといひ、そめいろはすなわち蘇命蘆だから、父の病は恢復する、などとこじつけて居たのであります。

須彌山とは、世界の中心にある山のこと。諸天もここに住み、日月もこれをめぐる。これを「蘇命蘆」として、「命の蘇り」を兼ねたのだろう。「蘇迷蘆」を「蘇る命の道」としている。度会何某もまた、地獄から蘇って、頭髮は半ば、白髪である。意味の不明な歌だけに、占いの呪歌の気味をおびている。島津忠夫氏によれば、この歌は、よく知られた俗歌だったらしい。

「歌占人は之を神歌として取扱つて」と柳田が云うように、これらの歌を「神詠」と見なしている。歌を「神ごころ」の表れと考えたのである。『菟玖波集』の付合いを引用しながら、謡曲の詞章は綴られている。

草の名も所によりてかはるなり

難波の蘆は伊勢の濱荻 救済

「名所」に取りあわせて、「難波」の「蘆」、「伊勢」の「濱荻」を

付ける。こんな連歌の付合を、神と人との応酬と考えたのが、古来の発想である。歌は、「神ごころ」を表す。それを占うのが「歌占人」である。それとして登場するのが、「伊勢国二見浦の神職二見大夫度会何某」である。「度会何某」とあるが、伊勢神宮の神官ではない。「神職二見大夫」とあるだけでよくわからない。「歌占」の徒にはちがいない。

(八) 新子良迎え

柳田國男は『女性と民間伝承』のなかで、伊勢・三津の北村某家に伝わる歌占の伝承について「どうして斯ういふ確かな遺物が伊勢の二見辺に保存せられて居たか」と問うて、つぎのように答えている。

「遺物」とは、「歌占の弓」のこと。
人によつては世阿弥の謡曲が出来て後に、伊勢の人たちが先祖を誇るべく、斯んなことを言ひ出したともいふか知れませんが、作り事ならば是迄の手数をつける必要が無かつた上に、現に三津の北村氏は由緒のある旧家で、御子良子と称する神宮の若い巫が、始めて御用を勤めるに先だつて、此家に来て盃事をする例であつたとも言へば、度会家次の子孫といふことは真実で無くも、歌占の弓を持つて居ただけの因縁は何かあつたので、寧ろそれが諸国に知れ渡つて居た為に、謡曲の方でも伊勢の神人といふことにしたものであらうと思ひます。

即ち斯ういふうつくしい小弓を持つて、歌占を解きつゝ旅行をした者が、伊勢国には其前から居たのであります。

伊勢・三津の北村某家に伝わる「歌占の弓」から、こうした伝承を持ち歩いて旅行した民間宗教者について思いを巡らしている。柳田は「伊勢比丘尼」、「歌比丘尼」と歌占は、関係があるだろうと推測している。彼女たちは、街道の辻に立って、旅人に歌をうたい、絵解きを

した記録があるとしている。柳田は、これら旅の宗教者が、卜占のわざに携わったことをくり返し述べている。また折口信夫は、歌占を「神の託宣歌」として、歌占巫女の口に出たものとしている。

それならば、歌占人を「男巫」としたことは、観世元雅の創作だったのだろうか。その辺の判断は、なかなか難しい。伊勢山田の曆陰陽師も、祈禱のわざにかかわっており、産土八社に属する卜占の徒であつたことは、見てきたとおりである。

今しばらく「新子良迎え」の行儀について見てみよう。『椽陰記』（神宮文庫蔵）、慶応三年（一八六七）十二月十五日の記事を示す。「御子良」は、伊勢神宮の神に仕える巫女、童女である。

子良座薦一枚ヲ敷其前ニ竹二本ヲ立テ注連ヲ曳。祢宜大夫ハ子良ニ向ヒ座ス。薦ノ上着用素襖烏帽子短刀ヲ帶ス。先祢宜大夫座シテ祓ヲ修ス。次立テ又祓アリ。次刀ヲ抜テ注連ヲ切ル。三ツヨリノ繩ヲ三度ニ切ナリ。切度ニ祓アリ。次ニ刀ヲ納テ畢ル。次着座ヲ改メ盃アリ。先祢宜大夫ヨリ始メ子良ニ差。子良飲テ祢宜ニ差。又子良へ差畢ル。

新子良を神宮に迎えるため、世話役の大物忌父は、二見の立石崎において禊をすませる。また新子良となるべき童女は、神宮から別火をもって中食が用意される。その儀式については省略する。

この「新子良迎え」については、中西正幸氏が『椽陰記』にしたがつて補足しているので、それも示して参考としよう。

「注連（歌占）」

中食後、三津村（慶応度は山田原村）の禰宜太夫宅にむかい、新子良が忌竹二本に注連繩をひいた庭上の座に着く。素襖・烏帽子姿の禰宜太夫が対座して修祓するたび、短刀にて注連繩を切ることに三度、終わって秘事の盃事にうつる。往古は木弓（長さ三尺、弦に短冊八枚付き）を用いて神意を占ったという。麻上下を着けた地元年寄が、汐合の渡舟場まで先祓い。舟を仕立て鹿海村にあ

伊勢の「歌占人」

がり、黄昏のなか大物忌宅にはいり、夕食と酒肴に預かる。

中西氏は、往古、歌占を引いて神意を占ったという、と補足しているが、これは何によったのかよくわからない。神事の場合を修祓して、秘事の盃ごとにつる。おそらく神の盃を受けるといふことであろう。そして歌占によって神意をうかがう。神は歌によって「神ごころ」を伝える。歌によって神意は占われる。そうして伊勢大神につかえる「御子良」は選ばれる。歌占の神事の場合には、童女と世話役の大物忌父、そして祓する禰宜太夫である。この三津村の「禰宜太夫」は伊勢神宮の神職と考えればいいのだろうか。不明であるが、おそらく神人であろう。

『歌占』にどこまで能作者の、創作の筆が入っているのか、確かめることはむずかしい。たとえ歌占が、歌占巫女の託宣歌だとしても、度会何某を「男巫」とするのであれば、卜占、祈禱のわざにしたがう陰陽師の姿が、反映しているとも思われる。たとえば謡曲『鉄輪』には、陰陽師清明が登場し、祝詞をあげて祈禱する。

謹上再拜・大小の神祇 諸仏菩薩 明王部天童部 九曜七星 二十八宿を 驚かし奉り 祈れば不思議や 雨降り風落ち

これは、誓願の定型にしたがつた詞章である。陰陽師は、あらゆる神仏屋宿を数えあげて祈禱する。「歌占人」度会何某とは、右のような占い・祈禱のわざに通じた巫祝の徒として造形されている、と考えればよい。つまり陰陽師の姿が投影しているのだ。

（九）二見・松下社の『牛頭天王儀軌』

男巫の「歌占人」が、かりに能作者の創作であるにしても、その仮構を支える信仰と習俗があった。前に述べたように、伊勢神宮の巫女「御子良」を迎える神事が、二見で行われていたこと。もう一つは、牛頭天王の信仰が、生きていること。おそらく二見の信仰を背景にし

伊勢の「歌占人」

て、『歌占』の男巫「神職二見の大夫度会何某」は、語りの舞台上に登場したのだろう。

前述の『椽陰記』（神宮文庫蔵）の記事が示すように、「子良迎え」は、二見の禰宜大夫の宅で行われた。ここにはあらためて『椽陰記』（神宮文庫蔵）の万延元年（一八六〇）三月三十日を示す。

・万延元年（一八六〇）三月三十日

明三十日新子良迎ニ付三津村祢宜大夫仲原（げん）を以明日大子良濱行ニ候間例の通勤行有之度旨申遣し置。

此祢宜大夫ト云ハ度会ノ家次が末葉ニテ北村某ト云。此家ニ歌占カ弓ト云物ありて伝来ス「木弓ニテ凡長三尺取柄ハ赤地ノ絹ノ上ヲ糸ニテ巻」。弓の本末ニ歌あり。本ハ「神こゝろたねとこそなれ歌うらの」末ニ「ひくもしらきのたつか弓かな」。又絃に短冊八枚ヲ付る。皆古歌也。此歌伊勢名所図絵に委しく出る。

此弓ヲ以テ子良ニなる事の否を神に乞しならむ。今ハ其家の秘事として盃するのみと聞しに予実地を見るに短刀を以て注連繩を度切ル。切ル毎ニ祓ノ言葉アリ。不知。「此事慶応三年十二月十五日ノ処ニ図を加へ記しあり。見るへし。此図今なし」

三津村の禰宜大夫「仲原」宅で「新子良迎え」は行われる。神事は「大子良濱」での潮垢離から始まる。「清め」の儀礼から始まるのである。三津の禰宜大夫の家には、代々「歌占の弓」が伝わる。これが、神宮の巫女を選ぶ神事の「遺物」（柳田國男）である。これが「歌占」の記念物として、後世に残されることになった。謡曲作者は、こうした三津の歌占神事をふまえて、男巫、度会何某を二見に登場させたのである。

もう一つは、二見松下社に伝わる牛頭天王の信仰である。松下社は、朝熊川の下流・江村の南東、松下村にある（『勢陽五鈴遺響』度会郡）。牛頭天王を祀り、蘇民将来の信仰を二見に伝えてきた。その詳細は、外宮の『八王子祭文』で見た通り、牛頭天王縁起による。いま松下社

には「牛頭天王儀軌」が伝わる。²⁰スサノオノミコトを祭神としている。松下は、伊勢神宮の神領であり、贊海神事が行われる。²¹

二見町は、八王子信仰の盛んな地域である。松下村、江村、三津村、西村、溝口村などの氏神は八王子であり、八王子社であった。²²一例を、山田原、溝口の氏神をここに示してみよう。昔から溝口は八王子社、箕曲社を氏神として祭り、明治三年に杉社と改められた。箕曲社が勧請されていることも注目される。山田箕曲郷の箕曲社との結びつきが考えられる。おそらくは社祝・陰陽師の往還が、かつてあったと考えられる。

二見には今も「蘇民将来」の説話は残り、厄除けの茅の輪と「蘇民将来」の護符は、玄関先に飾られる。こうした説話と習俗を支えてきたのは、八王子信仰である。武塔天神（牛頭天王）と龍宮の姫に生まれた八人の王子。彼らが疫神となつて、疫癘を祓い逐る。その縁起を語るのが、松下社の「牛頭天王儀軌」（元和六年・一八二〇）である。書写は根来寺・小池坊の僧、性慶法印。弘法大師の作とある。

龍宮の姫君との間に生まれた八人の王子は、行疫神となつて、蘇民将来の子孫を守る。その末尾を引いておく。適宜、読みくだした。

汝、槌聞ケ、蘇民カ子孫ナラハ末代ニ至ル迄守ント誓給フ。父天王仰ケルハ、柳ノ枝ニ蘇民将来ト云名ヲ書テ、男ハ左、女ハ右ニ就クベキ也。子孫眷属迄モ授富貴患難病難払フヘシト仰付給ヘハ、誠ニ目出度御事也。

こうして二見では、蘇民将来の護符を玄関に飾り、厄除けとする信仰行事は行われてきた。それを伝える資料が、この『牛頭天王儀軌』であろう。牛頭天王の祭には、この『八王子祭文』が読みあげられ、陰陽師がその祭式に加わっていたと思われる。

『二見町史』（氏神松下社）によれば、松下社は、安倍晴明によつて勧請されたと伝えられる。これは伝承とはいえ、松下社に属する陰陽師がいたことを思わせる。その意味では、山田産土八社の陰陽師と

通じている。二見に残る『牛頭天王儀軌』は、ここで行われた牛頭天王の祭を想像させる。そこに陰陽師が加わっていたことを思わせる。もちろん『歌占』は、能作者の創作だから、度会何某をそのまま陰陽師に結びつけることはできない。しかし、「伊勢の男巫」としたところから、卜占の徒たる陰陽師のすがたが投影していると思われる。「歌占人」度会何某とは、度会春彦のように「陰陽道信仰の人」なのである。

(十) 地獄の舞

度会春彦は、妙見星の祭にしたがう人であった。一方、度会何某は、歌占をする卜占の徒であった。どちらも、伝承、創作上の人物である。とはいえ、この二人を結びつけるものは何か。実在ではないにしても、いずれも「陰陽道信仰の人」である。度会春彦については、前に述べた。ここでは度会何某について記してみる。

「岡崎宮妙見本縁」によれば、度会氏の山宮祭は、「妙見尊星」を祀った。

今号「山宮祭」是也、凡岡崎宮座妙見北斗尊星者神主等妻子専供養尊重帰依相心験仏也、

山宮祭は、妙見、すなわち、北斗七星を祀る「星祭」である。これを奉じて、祭にしたがったのが「度会春彦」と伝える。

今、詳しく述べる余裕はないが、妙見星を祭る山宮祭は、「泰山府君の祭」でもある。

是妙見星を祭ると也。山宮の神事の祝詞にも妙見星を祭りて田園五穀養蚕を祈ると有り。亦古老の伝に、古は高原ノ前山にて祭りしを、後に此所里近きに便りて祭りし也。泰山府君を祭るなり、共いふ。鼓が岳は当地の名山なれば山祭りにてもあるべし。山を祭るに、妙見星、又我氏人に恵みある由来あればあわせ祭るにや。

伊勢の「歌占人」

〔勢陽雜記〕・度会郡「山宮が谷」

泰山府君とは、地獄の冥官であり、「泰山府君祭」は、冥府の神を祭る陰陽道の祭である。度会氏の「山宮祭」(泰山府君の祭)に、陰陽師がしががっていたのは前にみた。「北斗七星」(泰山府君)に、子孫の長寿、富貴、繁栄を祈ったのである。

度会何某は、乞われて、地獄の曲舞を舞う。

又承り候へば。地獄の有様を曲舞に作りて御謡ひある由申し候程に。お謡ひあつて御聞かせ候へ。

と乞われて、「名残の一曲に。現なき有様見せ申さん」と、舞の披露に及ぶ。度会何某は、神に暇乞いをせず、回国の旅に出たため、神の怒りにふれて、地獄に墮ちた。そして地獄を見て蘇ったのである。その苦しみのため、彼は白髪となった。彼は「地獄を見た人」、いわば、「地獄大夫」である。それならば、地獄の消息に通じている人といえる。地獄の舞を披露する度会何某は、地獄の冥官「泰山府君」を祭る陰陽師にふさわしく、「男巫」であり、「歌占の弓」をもつ卜占の徒である。神仏に仕える巫覡の徒といっている。

こうして二見大夫度会何某と比べれば、かえって「陰陽道信仰の人」度会春彦が見えてくる。「妙見大菩薩御門人」として、度会春彦を奉じたのは、外宮産土八社に属する「巫」、陰陽師であった。度会何某も、「伊勢の男巫」として登場する。地獄から蘇って、地獄の舞をまう彼は、冥界の神に仕える「巫」として設定されている。彼の「歌占」、北は黄に南は青くひがし白にしくれなるにそめいろのやま

にしても、「蘇命路の歌」、つまり「蘇り」の歌である。あるいはまた、鶯のかひこの中のほととぎすしやが父に似てしやが父に似ず(万

葉集)

という歌も、冥界とつながっている。「時鳥」は「死出の田長」ともいって、死者の消息を伝えてくれる「冥土の鳥」であることを思えばいい。こうして歌占は、度会何某が、冥界の消息に通じる巫覡の徒で

伊勢の「歌占人」

あることを物語っている。それを「陰陽道信仰の人」度会春彦に照らせば、度会何某もまた、陰陽師として設定されていると思われる。

こうした卜占の徒、陰陽師が、村々の産土の社に属して、邪気や疫癘を祓うまつりごとに従っていたのである。彼らは伊勢・志摩を巡遊して、村々の産土の神祭にしたがう卜占の徒であったと思われる。そうした民間の宗教者、曆陰陽師から造形されたのが、男巫「神職」二見の大夫度会何某」なのであろう。

〔注〕

- (1) 拙稿「度会春彦本縁—度会氏の祖先祭祀—」(『東海学園 言語・文学・文化』第七号) 平成二十年三月 同「宿神としての妙見童女像—度会氏の祖先祭祀と袍衣の祀り—」(『東海学園 言語・文学・文化』第九号) 平成二十二年三月 同「伊勢の白大夫伝説—山田の御頭神事と陰陽師—」(『東海学園大学研究紀要』第十六号・人文科学研究編) 平成二十三年三月
- (2) 柳田國男「山宮考」(『定本柳田國男集』第十一卷)
- (3) 拙稿「度会春彦本縁—度会氏の祖先祭祀—」(『東海学園 言語・文学・文化』第七号) 平成二十年三月
- (4) 本田安次「伊勢神楽之研究」(著作集『日本の伝統芸能』第七卷) 昭和四十五年
- (5) 柳田國男「先祖の話」(『定本柳田國男集』第十卷)
- (6) 『参宮の今昔』(神宮教養叢書第三集) 昭和三十一年
- (7) 柳田國男「唱門師の話」(『定本柳田國男集』第九卷)
- (8) (9) 斎藤英喜『陰陽師たちの日本史』平成二十六年十月
- (10) 柳田國男前掲(7) 論考
- (11) 山本ひろ子「牛頭天王島渡り」祭文の世界」(『異神—中世日本の秘教的世界』) 昭和四十八年三月
- (12) 柳田國男前掲(2) 論考

(13) 山本ひろ子前掲(11) 論考

(14) 柳田國男「女性と民間伝承」(『定本柳田國男集』第八卷)

(15) 島津忠夫『老のくりごと39』(『上方文藝研究9』) 平成二十四年六月

(16) 拙稿「神事と連歌説話—北野天神の歌詰橋説話—」(『説話と俳諧連歌の室町』所収) 平成二十八年八月

(17) 柳田國男前掲(14) 論考

(18) 折口信夫「短歌本質成立の時代」(『折口信夫全集』第一卷)

(19) 中西正幸『神宮祭祀の研究』平成十九年七月

(20) 『二見町史 史料集』平成四年三月

(21) (22) 『二見町史』(二見町史編纂委員会) 昭和六十三年三月

(23) 斎藤英喜前掲(8) 論考

(24) 地獄の曲舞については、松岡心平「地獄の曲舞」典拠考 貞

慶消息・曾我物語との関連をめぐって」(『観世』47-4) 昭和五十五年四月 黒田彰「歌占考」(『中世説話の文学史的環境 続』) 平成

七年四月

(25) 福田晃「鳥獸草木譚の意義—「時鳥と兄弟」をめぐって」(『昔話の伝播』所収) 昭和五十一年十一月